2011/3/5・・・・・・第１８１ 回買場紗綾市（SINCE 1996.3.2.）

買場紗綾市だより No.173

１５周年感謝市。「重伝建」で豊かな賑わいを！

「春風に　夢のふくらむ　まちづくり！」

みんなで楽しく“てっぱんダンス”（午後１時より）

編集発行　　買場紗綾市実行委員会　URL　http://www.kiryu.co.jp/kaiba/

2002.5.28.県観光協会表彰受賞・2003.5.24.桐生ファッション大賞受賞・2005.4.16.買場紗綾市 in 織物市場（川越）

季節のうた　　四　　「四季・春」

小雨降る午後。春一番の吹いた後日の雨は春雨か。それにしては少し冷たい。

今年の芥川賞作家・朝吹真理子の『流跡』（新潮社）を読み始めた。不思議なことに、８ページの中程にちょうどこの時季にぴったりの文章に出くわした。

「上っているのか下っているのかまったくのひららかなところであるのかすら曖昧なまま足をすくめて、春の門をくぐる。その門を境にして春が立つ。あたりがみどりにうちけぶってゆく。それまでが冬であったかというとそうでもない。いったい何との境なのか。はじめがないのだがはじまっている。」

確かにそうだ。季節の変わり目というのはこういうものなのだろうと思う。

雨の後の草や木の芽は春の訪れを確かに受け止めて、黄色味がかった芽や赤味がかった芽を膨らませる。小鳥たちも春の光を感じ取ってついばみに力が入っているようだ。外の空気は春の匂いがする。土の匂いなのか花の匂いなのか。

この時季にふさわしいのは、ヴィヴァルディの協奏曲集「四季」の中の協奏曲第１番ホ短調「春」の第一楽章・アレグロ。作者不詳のソネット（短詩）には「春がやってきた。そして小鳥たちはうれしそうに歌って挨拶をしている。小川は微風にやさしくささやきながら流れる。」とある。

春の門をくぐった桐生新町の買場紗綾市にも春が立っている。第１８１回。１５周年。買場紗綾市の春。（文）

買場紗綾市往来　　三　　「桐生音頭で末永く」

姫小路　通　忠

前回、「バスガイド志望者、殺到す」で紹介した初代コロムビアローズ。現在も活躍中である。その稿で記述した歌詞「田舎のバスはおんぼろ車…」は別の歌手の唄で読者の皆さんには大変御迷惑をおかけしました。

今回は其の延長線上の話となってしまうが、先日、上毛電鉄西桐生駅構内で一休みしていたら、下りの電車が入ってきた。すると、どうだろう、チャカポコ、チャカポコと八木節音頭が流れた。思わず、武者震い。故郷のノスタルジーに浸るのは小生だけであろうか、桐生にも素晴らしい音曲があるものだと感心した。買場紗綾市もどうであろうか、著作権というハードルがあるが、ローズの名曲は、庶民に明るさと笑いとロマンを与えてくれることには間違いない。初代コロムビアローズの曲を流すのも町おこしの一つになろうか、と思う。これが前回の結語でもあった。

ちなみに現在、買場紗綾市会場でも人気の紗綾市音頭。ついつい体が動いてしまう。買場紗綾市が誕生した当時、発起人の一人であった中村弥市氏は悩んでいた。冬場をどうするか、雨の日をどうするか、人が集まらなければどうしよう、などなど課題は多かった。誰が、猫の首に鈴をつけるのか、もうその悩みは無くなった。完全に地元に定着している。天満宮との兼ね合いも町おこしに相乗効果として現れている。

桐生新町保存会などという会も誕生した。前年、亡くなった上田守雄さんも一生懸命だった。町おこしは一人ひとりの協力がなければ進まない。できれば周囲をある時は拡散させ、収束させ、波紋を拡げていく。いい意味での市民参加である。これに音響が加われば、近所迷惑かも知れないが、お祭り効果もある程度、必要である。桐生には、素晴らしい歌がある。桐生音頭である。末永く、先人の残した歌を伝えていこう。継続は力なり。